



SUPPORTERS CLUB NEWS

# 友の会 会報

TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-2501

青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94

七戸町立鷹山宇一記念美術館内

鷹山宇一記念美術館友の会

TEL 0176-62-5858 FAX 0176-62-5860

## 五年間を振り返って 友の会設立五周年記念号

鷹山宇一念美術館は本年の八月をもって、開館五周年を迎えました。日頃より美術館に対しまして、物心両面よりご援助・ご協力をいただいております友の会の会員の皆様に、改めて心より感謝の御礼を申し上げます。

今年の夏の異常とも思える酷暑は、五年前の開館式典を思い出させます。美術館前の国道四号線の気温表示盤が、四十度という信じられない数字を示している中で始まった式典では、ご出席された多くの方々が美術館の誕生に祝福と期待を寄せられました。

これらの期待に応える

同時に、美術館に対する応援と私たち自身の啓発をはかるために、有志の方々と共に鷹山宇一念美術館友の会設立の準備を始め、同年十一月に設立総会を開催して今日に至っております。設立以来友の会は個人会員約二百人、法人会員約三十人の規模を維持しながら、様々な試行錯誤を繰り返しつつ、現在に至るまで活動を続けてまいりました。

美術館に対する物的な援助としては、会員の皆様からいただく年会費の中から一定の割合の入館料相当額を美術館に納付して、会員には入場券または入館証をお届けしております。美術館にとつては、安定した入館料として大きな意味を持つ収入源となっております。同時に会費収入の中から毎年一定額を、絵画購入基金として積み立てております。数年後には友の会所有の鷹山先生の絵画を、美術館に展示することができるとかと思われま

ます。このように、友の会という地域の協力組織と一体となった美術館のありかたは、後援をいただく社団法人二科会などの美術団体や報道機関からも高い評価をいただいております。

企画展のオープニングセレモニーには、美術団体の幹部の先生方や、時には大使館の担当官などの方々がご来賓として出席され、ご挨拶をされることがあります。遠路、当美術館までおいでくださった来賓の皆様を囲みお話を交わす機会に恵まれるとき、友の会会員としての協力活動を通じて、日常経験することの出来ない貴重な時間を過ごすことができます。

また友の会では、会員の研修と各地の美術館・博物館との交流の場として、毎年研修旅行を企画して多数の会員の参加をいただいております。時間と人員に制約がありますが、できるだけ多くの会員が参加できる内容を心がけております。特に本年は、友の会結成五周年の記念事業として、平成十二年一月にスペインへの研修旅行を計画しました。既に参加者・旅程等も決定し、美術館にとつても有益

な成果をもたらすため準備を進めております。レポートにご期待ください。同じく美術館との協力のもとに美術講座・講演会等も機会あるたびに開催しており、会員にとつての研修と交流の場としてご参加をいただいております。

美術館の事業の広報、友の会の活動の報告そして会員の意見発表といった、様々な情報の媒体として発行しておりますこの「鷹山宇一念美術館友の会会報」も今回で十六号を数えます。会員と美術館をつなぐ大切なメディアとして、また美術館の歩みを記録する貴重な資料として重要な意味をもつ会報の発行ですが、多くの方々のご協力無くしては編集も思うように進みません。皆様の一層のご協力をご期待申し上げます。

鷹山宇一念美術館友の会の活動は、すべて会員のボランティアと美術館からのご協力によって支えられております。



平成6年夏  
美術館開館式典の前に鷹山宇一、秋山庄太郎両先生を囲んで

力活動を積極的に実行しています。

このように、友の会という地域の協力組織と一体となった美術館のありかたは、後援をいただく社団法人二科会などの美術団体や報道機関からも高い評価をいただいております。

企画展のオープニングセレモニーには、美術団体の幹部の先生方や、時には大使館の担当官などの方々がご来賓として出席され、ご挨拶をされることがあります。遠路、当美術館までおいでくださった来賓の皆様を囲みお話を交わす機会に恵まれるとき、友の会会員としての協力活動を通じて、日常経験することの出来ない貴重な時間を過ごすことができます。

また友の会では、会員の研修と各地の美術館・博物館との交流の場として、毎年研修旅行を企画して多数の会員の参加をいただいております。時間と人員に制約がありますが、できるだけ多くの会員が参加できる内容を心がけております。特に本年は、友の会結成五周年の記念事業として、平成十二年一月にスペインへの研修旅行を計画しました。既に参加者・旅程等も決定し、美術館にとつても有益

な成果をもたらすため準備を進めております。レポートにご期待ください。同じく美術館との協力のもとに美術講座・講演会等も機会あるたびに開催しており、会員にとつての研修と交流の場としてご参加をいただいております。

美術館の事業の広報、友の会の活動の報告そして会員の意見発表といった、様々な情報の媒体として発行しておりますこの「鷹山宇一念美術館友の会会報」も今回で十六号を数えます。会員と美術館をつなぐ大切なメディアとして、また美術館の歩みを記録する貴重な資料として重要な意味をもつ会報の発行ですが、多くの方々のご協力無くしては編集も思うように進みません。皆様の一層のご協力をご期待申し上げます。

鷹山宇一念美術館友の会の活動は、すべて会員のボランティアと美術館からのご協力によって支えられております。

ボランティア活動で提供される物的・人的なご支援は、何らかの利益や見返りに直接つながるものではありません。けれども美術館に対するサポーターとしての立場で友の会に参加され、相互の交流と自己の啓発を繰り返すなかで得難い文化的刺激を受ける機会には、これからの生涯学習社会の目的である自己実現の一助となるのではと期待されるのです。

友の会設立五周年を迎え、今日まで賜りました会員の皆様の熱意に衷心より感謝申し上げますとともに、これからもご指導ご協力をお願い申し上げます。

山本洋一(友の会会長)

ボランティア活動で提供される物的・人的なご支援は、何らかの利益や見返りに直接つながるものではありません。けれども美術館に対するサポーターとしての立場で友の会に参加され、相互の交流と自己の啓発を繰り返すなかで得難い文化的刺激を受ける機会には、これからの生涯学習社会の目的である自己実現の一助となるのではと期待されるのです。

友の会設立五周年を迎え、今日まで賜りました会員の皆様の熱意に衷心より感謝申し上げますとともに、これからもご指導ご協力をお願い申し上げます。

山本洋一(友の会会長)

# 会員からの声 ひーやー

会員の方々から、美術館についてや企画展、研修旅行についての感想文が寄せられましたので、ご紹介いたします。

## 鷹山宇一記念美術館 に寄せて

十和田市には、美術館がありません。美術館のある七戸町が羨ましい限りです。美術館は十和田市から近いこともあり、たびたび訪れています。先だつての平山郁夫展にも人を連れて数回行きましたが、いつも来館者が多く盛況で何よりと思えました。あの奥入瀬の屏風絵は、どこへ納まるんでしょうね。

さて私事にわたりますが、私の父は七戸町出身で八十八歳です。もう十年以上前のことと記憶しておりますが、ある日、唐突に「おらの同級生で一番出世は宇一かなあ」と漏らしたのです。「なに宇一って言うのは鷹山宇一という絵かきか？」と聞いたたら、「そんだ」と

父が言いました。でも、年が少し違うようなので、「なしてよ」と言ったら、「昔は、一つ二つ違つて学校さ入るごどあ、よぐあつたんだ。」とのことでした。ですから、宇一画伯と父は同級生だったので。そんな縁から杉屋敷のおかみさんから会員の誘いを受けたとき、二つ返事で入会しました。美術館は、県内であれば、どこにあつても、車で行けばすぐ行けます。

七月の末でしたが、明山応義画伯の誘いを受けて、一緒に鈴木継男さんが待つている八戸市を訪れました。八戸ガス相談役の鈴木さんから、八戸市へ七十三点の絵画の寄贈があり、さらに明山画伯の二〇〇号と一〇〇号の母子の絵を同氏が購入され、市へ寄贈されると言うことで、納入のため一緒に行かないかとの誘いを受けたためでした。先に寄贈されている鈴木コレクションの世界、華麗なる女性像の中へ、一際大きい二点の絵が飾られたのです。圧巻でした。鈴木さんのお話を聞いて、これは平成の怪物だと思いました。新聞紙上では額面三億円の寄贈と知ってはおりましたが、とてもスケールの大きい方で、文化、芸術の大切さを静か

に語られ、私はそれを聞いて感心し驚いて帰ってきました。世にも希なる奇妙な方が八戸市におられるので、ビックリしました。どこの美術館も作品購入の予算は十分ではなく、やりくりに苦労しているのが実情です。芸術、美術では腹の足しにはなりません。箱物が出来ても入る物がなければ何をか言わんやです。

彫塑家の佐藤忠良さんが講演された時の話ですが「芸術は必要ムダなものからと言つて腹が空くわけでもない。だけど、この必要ムダこそが人々の心を和ますものです。」というようなことを話されました。その時のお話が今も私の脳裏に残つております。腹の足しにならない美術館なんです。が、県内のところどころに必要であり欲しいものです。私は十和田市にも、という気が……今までの芸術は奇特な方達の善意と奉仕と努力なくして成り立つものではありませんでした。七戸町の鷹山宇一美術館設立のため、ご尽力された皆さんに感謝し、拍手を送つて終わります。

岩城康一郎(友の会会員)

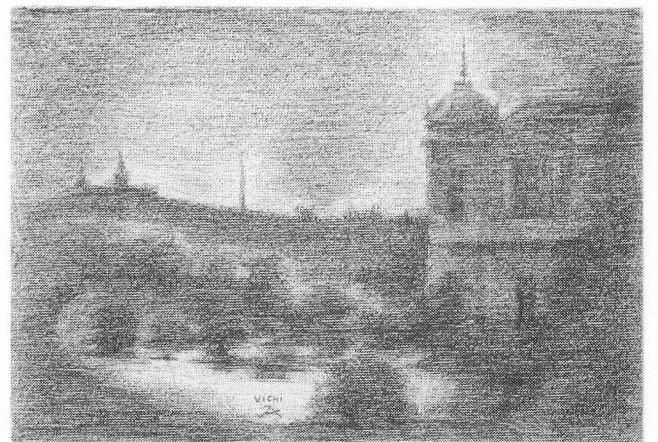
## 鷹山宇一素描展を 鑑賞して

この会場に入る時、私は、鷹山画伯のアトリエを見せられて頂くような緊張感を覚えた。拙い、自信のない絵を描いている自分にとって、画伯独特の静謐で重厚な中にも、ロマンティズムとモダニズムを感じさせる絵の世界は、どのようにして生まれて来るのか、大変興味深い事だつた。

デッサン展というタイトルだが、そこにはタブローのような、存在感のある絵が並び、その何かを語りかけるような一枚一枚に、引き込まれながら進んで行つた。複雑な何本もの線が的確に交錯した桜、線描きの桃の一枝は、感性豊かな色を施され、私の味覚中枢を刺激し、数枚の裸婦は、パステルのやわらかな表現で、肌の弾力や体温まで感じさせてしまう。又、四枚の木版の顔は、デフォルメされ、それぞれの個性を持ち迫つて来る。油絵の作品の中でシルエツトとして見覚えのある建物群の、洋風な雰囲気。そして、簡潔な、日本画のような線で表現された鯉、椿、メロンとプラム等。

どれも、モチーフへの愛情と真摯な気持ちが見られ、画伯の人柄が感じられた。そして、モチーフから受ける印象によつてどううか、様々な表現方法を採用している事も興味深かつた。又、これらのデッサンの中にすでに、タブローで感じられるロマンティックな雰囲気やモダンな感覚が、キラキラと見え隠れしていることに驚かされた。

そしてその後で油絵を見たとき、改めて、鷹山芸術の奥の深さと暖かさを感じ、あの重厚な作品の出来る陰に、このような的確に物をとらえる力と、対象物を自分の心の中で濾過して表現する文学的素養があり、それは又、画伯の人生観や価値観によるものだと思つた。美術評論家の瀧井三氏が、鷹山芸術について、画集に寄せた文の一部が、思い出された。「——その浪漫的絵画性は、幻想に発するから、非現実の奇異感を常に漂わせているが、奇で人の好奇心に訴えるだけなら、



「デッサンは研鑽の場」とアトリエに秘蔵されてきた素描たちを公開

美的にどうということなく、低次元の芸術性とせねばならぬ。だがこの画家の幻想画の場合、その「奇」な感じを越えて薫ってくる高踏と純粹とがある。——この高踏と純粹の薫りがあるせいで、本物であり、正統であり、一個の価値だ、と言える。——そのレゾン・デートルを確信している。」とある。

「静謐のレゾン・デートル」というサブタイトルがぴったりの、沢山のデッサンを見せられて頂いた事は、自分に多くの事を改めて問いかける、とても良い刺激となり勉強となつた。

高橋美津子(友の会会員)

# 国際写真サロン

## を見て

「風の目」というのがとても好きでした。対象は赤ちゃんと若いカッパル。光が母と子と父親の顔にバラ

ンス良くきれいに当たり、三人の位置もあつらい向きベビーカーと赤ちゃんの布のカラーが利いていて抜群です。おまけに背景が海で

しようか単純化されているため、家族が浮かび上がって、風と戦う三人の大変さの中に、ほほえましい物語が表現されているのです。

写真作りには最良の条件が揃ったもんだと言えそうですが、カメラマンにとつてみれば最悪の状況の中で撮影だったと思われ、ただただ脱帽するのみでござ

います。思わず、家族とカメラマンどちらにも「頑張れ！」といったくなるではありませんか。

私は、この作品がいくつかの審査員特別賞の中で一番好きです。

この国際写真サロン、昭和二年に始まって、今年が五十九回目だといっています。今年も内外一万一千点余からの入選作百八十点が、美術館の御努力で継続開催さ

れ、写真マニアのみか、多くの人々の目を楽しませて下さいました。感謝と世界の作品に触れ得る幸せを思いながら、ゆつくりと一巡鑑賞させていただきました。「通学路」

いっばいの藤の花を背景に、傘をさした子供たち七人がバス待ちの一時、女の人が目前を早足に横切つていきます。ふと私は黒沢映画の好きな作品の一つです。私の好きな作品の一つです。

色とりどりの樹木や芝桜でしようか。そして茅葺きの屋根が覗いて、花の中で巡礼と老人が話し込んでいます。これはまさに桃源郷です。二人の会話が聞こえてくるような錯覚に襲われます。

「惜敗」  
陸上競技会での出来事でしょう。敗れ傷付き悲嘆に暮れ顔を被う女の子を、庇うのは友達でしょうか。やや甘い感傷がよぎりますが、これだけの単純な画面の中に物語が詰まっているよう

で大好きな作品です。「おねだり」(セツカ)  
親鳥が二本の小菊の茎に足をふんばって、小鳥に餌を口うつし。背景が淡いグリーンで心安らぎます。微笑ましくも、見事で憎らし

いほどのシャッターチャンスです。うまいなあと思えました。

まだまだ好きな作品が沢山ありますが、嫌いなものもあるのです。異様なものや不気味なもの、ドライなデジタルもの、毎回毎回登場しているモチーフで、見飽きているもの、奇をてらただけのもの。

と、好みで勝手なことを言ってしまうましたが、私には、総じて今年が好きなお作品が多かったような気がいたします。

いや、善し悪しや、好き嫌いとはかく、自分の知らない世界や、覗き見ることの出来ない世界を、シャープな画面で、鑑賞出来ることは、何としても素敵なことだと思えます。ありがとうございます。

佐藤 亘  
友の会会長・友の会会員

写真展では毎回ご協力いただいているフジの皆さん。展示作業を終えて...

# 研修旅行に

## 参加して

青森市在住の私を、最初に七戸へと引き寄せたのは、ガウディだった。その次は平山郁夫。したがって、七戸町へ行く時は殆どわき目もふらず、一直線に鷹山宇一記念美術館を目ざし、観

終わつた後も、これ又寄り道もせずには帰路に着く。ところが、7月22日は中央公民館の集合だと言う。自他共に認める方向音痴の私は、

学芸員の大池さんのお陰でやつと中央公民館に辿り着いた(白状すれば、中央公民館すぐ近くの、ガソリンスタンドのお兄さんにも、お世話になった。朝も早よ

から迷子になった私に、七戸の人達は親切だった。皆さんありがとうございます。

という事で、私の記念すべき第一回研修旅行の旅は始まった。私は、今迄様々な団体のバスに乗り合わせた

が、バスを降りる際の所作で、その団体の雰囲気かわかる(ナンチャッテ)。今回の皆さんは、実にゆつたりとしていて、さすが美術愛好家の心の広い方ばかりだ、とお見受けした(これは本当です)。

さて、研修目的の地の内、まずは野田村にあるアジア民族造形館。展示品は、衣・食・住はもとより、神物・楽器に至る迄多岐に渡り、

収集された方の熱意が感じられ、展示品が葺ぶき屋根の日本古来の家屋の中に、妙にピッタリ納まっているのが不思議だった。日本の鳥居の起源がタイにあった事、チベットの僧がシユロの葉に書いた経典が元で、「葉書」という言葉が生まれ

た事など、大変参考になる話が出て、改めて、アジアの中の日本の存在を感じた。この館へのアクセスは良好と言えず、個人的にマイカーで気軽に往ける所ではないので、本当に貴重な経験をさせて頂いた。

そして次は、久慈琥珀博物館。レンズの奥の琥珀の中の虫を見ていて、ジエラシックパークを思い出し、物影からテラノザウルスににらまれて

いる様な気がして、思わず後ろを振り返ってしまった。人間の造り出す芸術の世界もすばらしいが、自然が生み出す偶然の産物もすごい、と思わずにはいられなかった。

という事で、岩手での暑い研修は無事終了した。今回の旅では、バスの隣席の今別さんに大変親切にして頂き、昼食の際は、向かいの席の方に、ホヤを頂いちゃって(ラッ

キー)、おまけに、焼魚のしんは、お頭の方だった。しっぽの方々すみません(行った人のみぞ知る)。

最後に蛇足を。奥入瀬ロマンパーク(地ビール)は「つと庵」(そば)、これは勉強の為に持って行った私の手帳に、当日書かれたメモである。その夜、このメモを見ながら、せつかくいいものを見て来ても、これではいけない!!と反省しつつ床に着いたつもりが、翌朝、お

いしそうなそばの夢で目が覚めた。あー、そばはそばでも、もうちよつと芸術のそばの夢が見たかった!!!

最後の最後に、また皆さんとお会いできる機会があればいいなと、首を長くして、青森で待っています。

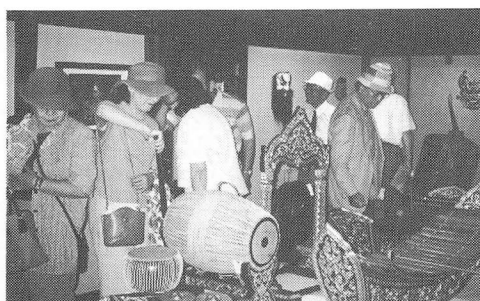
山崎真由美(友の会会員)

山崎真由美(友の会会員)

山崎真由美(友の会会員)



写真展では毎回ご協力いただいているフジの皆さん。展示作業を終えて...



アジア民族造形館にて

# 前田真三先生との出会い

東洋

美瑛の丘の写真の入った名刺を作り、もらった人に喜ばれると書き、続いて「前田さんこそが美瑛や富良野の（丘）の美を発見し、芸術に高め見る人の眼を変させた。その前田さんを美瑛にとどめ、小学校の廃校跡を提供して、写真ギャラリー―拓真館の創設に尽力したのは、元美瑛町企画課長の今野さんだった。が前田さんは病に倒れ、今野さんはがんで亡くなられた。今拓真館は北海道の名所になり、年間数十万の人が訪

れている。……今ごろ美瑛の丘も雪にちがいない。」と書いた日本史家・色川大吉氏のこの文章を新聞で読んだのは、昨年十一月十一日。前田先生の訃報があったのは丁度十日後の十一月二十一日であった。闘病生活に入ってから三年半がたつていた。

私が前田真三というお名前を知ったのは、「日本の彩」という先生の二冊目の写真集であった。街の本屋で偶然手にした、日本画風の洒落た写真のケースに入ったこの写真集には、それ迄あまり見ることのなかった類の写真が満載されていた。ページを繰って間もなく、私は自分が金縛りになっていくのを感じた。自然の営みのあらゆる場が、優しくしかもシャープにとらえられ、一枚一枚が実に端正であり輝いていた。そこには、これ見よがしの気負いもなければ銜いもなく、又野放図に撮られた泥く

ささなど微塵もなかった。そして無礼を省みずになら、私もいつかはやってみたいと思っていた写真が悉くそこにあった。衝撃であった。中でも私だけが知っているつもりで、秘かに見守り、チャンスをねらっていた奥入瀬の小さな楓が、見事な作品になって目にとびこんできた時には正直息をのんだ。暫く呆然としていたが、ふと我にかえり、慌てて表紙の写真家名をあらためたのだ。

その一週間後私は上京した。たまたま通りかかったあるフォトサロンで、写真集と同じタイトルの写真展が開かれていた。そこで前田先生本人とお会いする事になるのであるが、この時も写真集のとき同様、驚きかつ戸惑いを感じたものである。写真家といわず芸術家といわれる人たちはおしなべて、わざとらしい目立つ恰好をしたり、横柄な言動をとるものであるが、会場の前田先生は違っていた。ジャーナリスト小堺昭三氏がその著書「カメラマンたちの昭和史」で、前田先生の第一印象を「寸分の隙のない身なり、温厚な態度」とのちに書いたし、同じような印象を受けたと書く人たちがその後もなん人もい

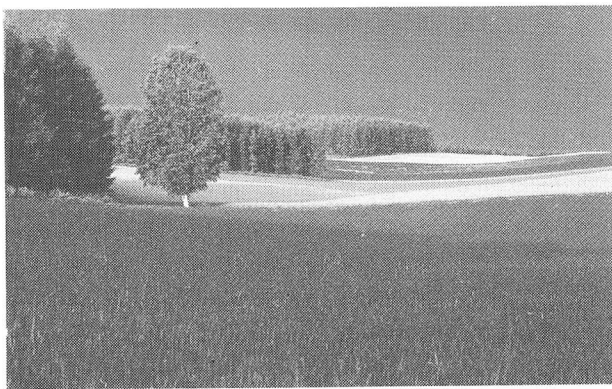
るが、真にその通りであった。展示されている作品を前にして、私は、このような作品が出来る理由を得心するのに、長い時間はいらなかった。初対面の私の小さな質問に対し、先生は実に真摯であった。そのお話は、撮影から感光材迄も及びながら簡潔且つ適切そのものであった。一九七六年今から二十三年前のことである。

この「日本の彩」の前後に出た大型の写真集「ふるさと」の四季」と「ふるさと」の山河」に続いて、一九七七年に名作「出会いの瞬間」が刊行された。それは、それ迄誰もがなし得なかったものであり、写真界のみならず出版界にも大きな衝撃を与え、大反響を巻き起こし、ある評者はそれを評するのに「風景革命」ということばを使ったほどである。その後先生の写真は、写真集だけではなく、テレビ印刷を媒体としてあらゆる所で見られるようになるのであるが、しかしそれらはいわゆる絵葉書写真とは一線を画するものであったことは衆知の通りである。私はそれを、ある人たちからはキツチュなどと言われながら、アメリカ国内では圧倒的な人気を得、支持さ

れている画家ローマン・ロックウェル（「サタデイ・イブニング・ポスト誌」の表紙を三十数年も飾り続けた）や素朴派の代表モーゼス・バークマンのそれと、内容は違っても意味するところは同じではないかと思うのである。

北海道の麦やトウモロコシ、ジャガイモや豆類の大きな畑の中に発見した「ヨーロッパの田園に匹敵する洒落れた風景」が诗情あふれる写真集「丘の四季」となり、それが日本中から人々を呼び、又、自然派を標榜するアメリカのギタリスト、W・アッカーマンを虜にし、足を運ばせ、コンサート迄開かせてしまったのであった。

前田先生についてなにか書くように言われながら、常に感じたものである。最後に、私はいく度か撮影に同行した事があるが、そこでも、作品にとらえず見習うべき事が多くあったことを記しておきたい。なにごとに対しても、毅然としていながら、優しさといったわりの気持ちを持つて接する先生の姿勢に、人間としての豊かさというかゆとりのようなものを私は



本展に出品されている前田真三作品「麦秋多彩」

るが、真にその通りであった。展示されている作品を前にして、私は、このような作品が出来る理由を得心するのに、長い時間はいらなかった。初対面の私の小さな質問に対し、先生は実に真摯であった。そのお話は、撮影から感光材迄も及びながら簡潔且つ適切そのものであった。一九七六年今から二十三年前のことである。

この「日本の彩」の前後に出た大型の写真集「ふるさと」の四季」と「ふるさと」の山河」に続いて、一九七七年に名作「出会いの瞬間」が刊行された。それは、それ迄誰もがなし得なかったものであり、写真界のみならず出版界にも大きな衝撃を与え、大反響を巻き起こし、ある評者はそれを評するのに「風景革命」ということばを使ったほどである。その後先生の写真は、写真集だけではなく、テレビ印刷を媒体としてあらゆる所で見られるようになるのであるが、しかしそれらはいわゆる絵葉書写真とは一線を画するものであったことは衆知の通りである。私はそれを、ある人たちからはキツチュなどと言われながら、アメリカ国内では圧倒的な人気を得、支持さ

るが、真にその通りであった。展示されている作品を前にして、私は、このような作品が出来る理由を得心するのに、長い時間はいらなかった。初対面の私の小さな質問に対し、先生は実に真摯であった。そのお話は、撮影から感光材迄も及びながら簡潔且つ適切そのものであった。一九七六年今から二十三年前のことである。

北海道の麦やトウモロコシ、ジャガイモや豆類の大きな畑の中に発見した「ヨーロッパの田園に匹敵する洒落れた風景」が诗情あふれる写真集「丘の四季」となり、それが日本中から人々を呼び、又、自然派を標榜するアメリカのギタリスト、W・アッカーマンを虜にし、足を運ばせ、コンサート迄開かせてしまったのであった。

前田先生についてなにか書くように言われながら、常に感じたものである。最後に、私はいく度か撮影に同行した事があるが、そこでも、作品にとらえず見習うべき事が多くあったことを記しておきたい。なにごとに対しても、毅然としていながら、優しさといったわりの気持ちを持つて接する先生の姿勢に、人間としての豊かさというかゆとりのようなものを私は

**鷹山宇一記念美術館で好評開催中!!**  
**前田真三写真展「丘の四季」北海道の大地と自然**  
9/11(土) ↓ 10/11(日)迄 ◆月曜日休館(10/11は開館)  
ヨーロッパの田園を思わせる、北海道中央部・美瑛町付近に広がる丘陵地帯を写した前田真三の作品群はあまりにも有名です。初めてこの丘の一角に立った時、五体が痺れるほどの感激を味わったという前田は、以来25年以上、旭川市から富良野市に至る丘陵地帯を数多く風景写真に収めました。1987年には美瑛町に自らの写真ギャラリー・拓真館を開設しています。今展では、代表的な作品52点により「風景を出会いの瞬間に引き出す」とを信条とし、美瑛の丘にその刻を追究した前田の世界に迫ります。

◆入館料：…通常どおり。一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円。友の会の会員の皆様におかれましては特典として入館料を半額にさせていただきます。  
◆拓真館から前田真三関連グッズも多数取り寄せております。お問い合わせの際は是非採館下さい。お待ちしております。

開館5周年に寄せて

七戸町立鷹山宇一記念美術館  
館長 鷹山 ひばり

五年前の七月三十一日、翌日の開館式典に出席のため来七された吉野毅先生とともに、入院中の谷村保雄開発室長に面会いたしました。

病室に入ると、お別れが近づいたことをすぐに悟れるほど痩せた身体が目に見えました。窪んだ眸を閉じ、身動きひとつしないでベッドの上に横たわっている谷村さんに声をかけると、照れくさそうな顔をされ、わたしたちの手を握りしめてくださいました。

かすれた声で再会の喜びと、明日への思いを途切れ途切れ話しをされる中、「父が美術館を見て驚いている」と申しますと、うれしそうに微笑み「わたしは命を賭けるものがあつて幸せだった」と一条の涙を骨張った頬に流されました。

今までのさまざま事柄が一瞬のうちに巡り廻ったのでしうか、突然、谷村さんの嗚咽と蟬の鳴き声が

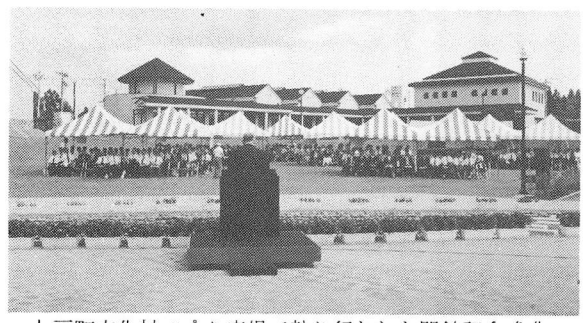


重なり合い、空気がそのまま静止してすべての動きが止まってしまいました。

暑い病室にわたしたちはただ立ちすくむばかりで、だんだん頭の中が透明になつてくると、壁際に懸けてある「明日」のために用意されたスーツが眼に飛び込んで来ました。

開館式終了後、戸館栄一さんが報告に向くと、谷村さんは安堵されたように大きく頷かれ、「よかった」と振り絞るような声を出されたそうです。

その晩、開館式の余韻がまだ残っている美術館にあるスーツに着替え、きつと来て下さったに違いない、



七戸町文化村・パイン広場で執り行われた開館記念式典

と思っております。一踏み一踏みながら父の作品を丹念に見て回り、ランプの美しさに感嘆なされ、昼間の光景をあの満足げなお顔でガラスの窓越しにご覧になっていた、わたしは確信いたしております。

谷村さんは、翌日ご家族に見守られて静かに旅立ちました。

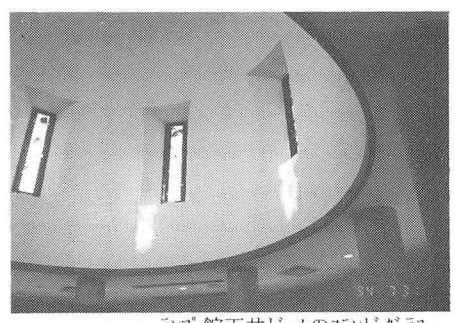
その開館式は、今年と同じように真夏の太陽が容赦なく照りつける記録的な暑さの八月一日で、日除けテントの下からは、草いきれ

とともにむせ返るような熱風が肌伝わって来ました。来賓として出席された秋山庄太郎先生は、お会いするたび「七戸は暑かったねえ」と口にされるのが常で、「酷暑」はこの町の枕詞の如く思っております。

ランプ館天井にあるステンドグラスの制作者、池内康子先生のご母堂は、父と同じ飛行機で七戸へお出ででした。開館前のだれもいないランプ館で、円柱に寄りかかり手に持った小さな写真を見つめながら、一生懸命に話しかけておられるご母堂の姿を、今でも忘れることができません。

この美術館の完成を見ることなく、二か月前に他界された康子先生と二人で喜びをゆつくりと味わっていらしたのでしよう。「康子、よかつたね。七戸にやつと来たね」という声が静まり返った館内から聞こえて来ていました。

康子先生のご両親は、挙式後すぐに赴任先の七戸へ来られ、父上は奥羽牧場の副場長として三年間こちらで過ごされています。康子先生が胎内に宿られたとき東京に戻り、今日五十年ぶりに七戸の土を踏まれたとのことでした。ご母堂は、ご自身の人生



ランプ館天井ドームのステンドグラス

の中でいちばん幸せな夢のようにだった新婚時代を過ごしたこの七戸に、病弱で嫁ぐことなく先に逝った、娘の最後の作品が納まったことに、不思議な神の意志も感じました。

夕刻、その円柱に西陽がステンドグラスを射すと、赤や緑、青や紫のとりどりのガラスの色彩がゆらゆらと陽炎のようにうごめき始め、まるで聖画のキリスト降臨時に描かれた、聖母を祝福しているような、敬虔で荘厳な世界が映し出され、わたしは声もでませんでした。

その年の暑い夏がようやく過ぎ去り、秋風が立ちこめた紅葉の盛りに、ご母堂の訃報を受け取りました。

美術館の前で撮った記念写真が綺麗な布に包まれて大切に枕の下に置いてありました。担当医には意識が混濁していても、七戸の思いで話ばかりなさつていた、そうです。

何年か何十年か先には、これらのことはいつしか忘れ去られていくでしょう。しかし、八月一日の開館記念日を迎えるたびに、わたしにはこの二つのできごとが、きのうのこのように鮮明に想い出されてまいります。

この美術館には、命を賭けてくださった方々が何人もおいでです。また、そのことをお許しになり支えて下さったご家族の愛と涙もたくさん溢れております。

わたしは、神仏にただ手を合わせることしかできない微力な人間ですが、小原恭平先生をはじめ、ご恩のある亡き方々にいつも接していることが、わたしを美術館職員としての礼節と責務を守らせ、人間として節度ある言動と感謝の心を忘れさせないでくれている、と有り難く思っております。

わたしにとりまして、この美術館での歳月は祈りの日々であります。これからも、感謝と意思をもって精進してまいります。

# 鷹山宇一記念美術館で11/20(土)→11/28(日)まで開催

## 青森県立美術館で11/20(土)→11/28(日)まで開催

青森県では現在、2004年頃の開館を目指して、美術館建設の準備をすすめています。同時に、収集方針にそった体系的な収集活動を続けており、昨年度(1998年度)は、阿部合成、工藤甲人、工藤哲巳、小館善四郎、関野準一郎といった郷土作家の作品と、中村宏、篠原有司男、荒川修作、浜口陽三といった国内作家、および海外版画の計37作品を新たに収集しました。本展は、その新収蔵品を軸に、既に取得している同年代の作品を加えて、1955年

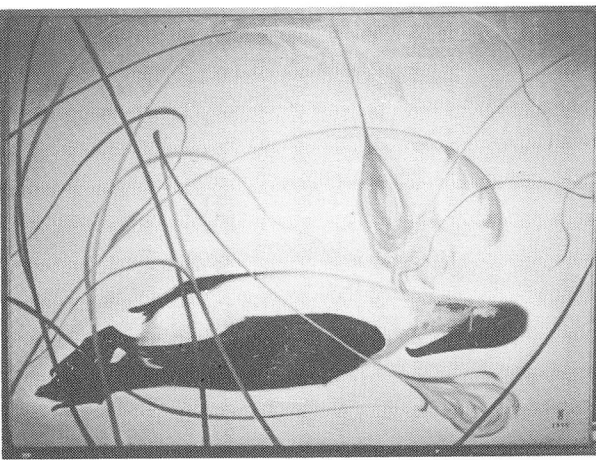
から65年にわたる日本美術10年の歩みを総花的に紹介するものです。5、60年代は、旧来的な美術概念から逸脱する様々な新しい美術的試みがなされた時期でした。まず、1954年に芦屋市で「具体」という美術グループが結成され、行為(アクシオン)や概念(コンセプト)のみで成立し得る作品を提示し、翌56年には「世界・今日の美術展」においてアンフォルメルや抽象表現主義といった海外の最新美術が紹介され、あつという間に

日本の美術界はそのうねりに飲み込まれていきます。そして60年代に入ると、

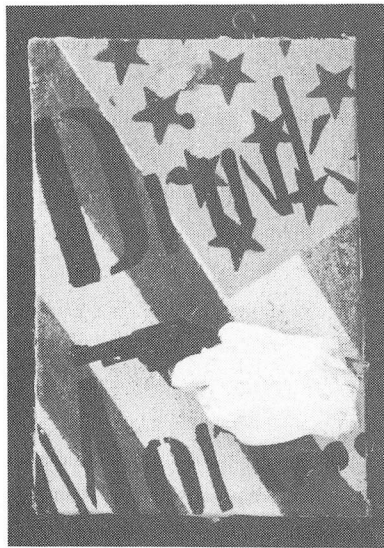
「反芸術」と称される美術的な意匠を捨てた作品が数多くつくられていきました。戦後、政治思想と結びついたリアリズムとアヴァンギャルドで展開した日本の美術。しかし55年頃を境に多くの作家たちが、美術の自律性を求めるかのようにアンフォルメル、反芸術へとその活動を展開させていったのです。その中心的存在こそ、「反芸術」という言葉を生み出させるきっかけをつくらせた工藤哲巳に他なりません。

一方で、そうした時流に乗ることなく自身の芸術性をじっくりと探求していく作家もいました。しかし、どちらかが正しくどちらかが間違っているというわけではありません。ただ、美術には多種多様な「表現のかたち」があるということ。この時代は、そうした可能性が一気に広がり、美術の多様化がはじまった時期と言えるのです。それぞれ、一見オーソドックスな風景画の中にも、一見ゴミのように見える作品の中にも、作家の強靱な主張が込められています。まずはすべてを受け入れ、そこから「美術」とは何なのか、「表現」とは何なのか、じっくり考えてみてください。

工藤 健志  
青森県教育庁美術館整備・芸術パーク構想推進室学芸員



小館善四郎「撃たれた鳥」1955年／油彩・キャンバス／53.0×72.7cm



篠原有司男「ピストル」1965年／石膏、油彩・キャンバス／45.0×31.5cm

なお、本展は当館のほか県内2会場で開催されます。会場・会期については左記のとおりです。是非ご来館ください。

- ### 6月
- 七戸小学校4年生50名来館／火曜サロン開催(8日)
  - 青森山田学園みちのく散歩道40名来館／二科会青森支部展打合せ(16日)
  - ATV館長取材(17日)
  - 友の会主催による油絵教室第1回を2階工房において開催、11月までの全10回、講師は小川敏雄氏(20日)
  - 平山郁夫展ボランティア参加者をお招きして昼食会を開催(24日)
  - 第59回国際写真サロン展開催準備のため臨時休館、フォトしちのメンバーが作品展示に協力(24・25日)
  - 第59回国際写真サロン展初日(26日)
  - 全日本写真連盟青森県本部主催による講演会・モデル撮影会を開催、講師は全日本写真連盟理事であり国際写真サロン審査委員の岩永辰尾氏(27日)
  - 全国博物館館長会議に鷹山館長出席(29日、於東京大学)
- ### 7月
- 七戸小学校6年生44名来館(1日)
  - 第59回国際写真サロン展最終日(11日)
  - 「鷹山宇一の素描展」二科会青森支部展開催準備のため臨時休館(13・16日)
  - 火曜サロン開催(13日)
  - 七戸中学校職場体験学習に生徒4名実習／安藤幹衛先生をお迎えして鷹山宇一の素描展「二科青森支部展」オンラインプレゼンテーションを開催(16日)
  - 友の会主催による油絵教室第2回を開催(18日)
  - 七戸町教育委員会主催の「七戸町文化ガイド学習会を2階工房で開催、鷹山美術館について館長が講話(23日)
  - 友の会研修旅行「岩手県アジア民族文化と琥珀の旅」に24名参加(25日)
- ### 8月
- 開館記念日無料入館に460名の入館者(1日)
  - 平成11年度七戸町児童交流事業で岩手県遠野市から中学生20名が来館(4日)
  - 七戸町文化協会主催による「グリーンファーム弦楽合奏団」演奏会を絵画室1・2で開催(6日)
  - 火曜サロン開催／財団法人鷹山宇一記念美術振興会平成11年第3回理事会を開催(10日)
  - 20時まで美術館夜間延長開催を実施(13・14日)
  - RABラジオの生放送で、鷹山宇一の素描展を紹介(13日)
  - RABラジオの生放送で、鷹山宇一の素描展を紹介(19日)
  - FMあおもり「奥村潮のサロン」に鷹山館長生出演(20日)

# 【七戸町 柏葉館 展 示 絵 画】 「牡丹に唐獅子」

ものがたり

□□□ 福士 忠 □□□



+++++ 前回までのあらすじ ■

七戸町・柏葉館の壁面を飾る、鷹山宇一作「牡丹に唐獅子」。この作品が生まれた背景について当時の事情に詳しい友の会会員・福士忠氏により、戦前・戦後の七戸町の文化の状況、この作品誕生の経緯について、そして、上京していた鷹山画伯が疎開帰郷した前後までが語られました。

+++++ 好評の連載も今号で最終章を迎えます。

## 五、「牡丹に唐獅子」の 製作前後

製作前後

前記花菱会の舞踊は、町にとつても町内や部落の活動などにも色々と力を貸して来たのであるが、何分にも人集まりのただっ広い場で演じられる踊りでは、折

角の名演も値打ちが下がるというもの。そこで盛田文造会長は（昭和二十二年四月から町長就任）舞台引き締めのため、バック幕が必要と考えたが何分にも物資拮据の終戦直後のこと、右から左へという訳には行かない。ただ幸いな事に、描き

手は鷹山宇一という日本画壇に注目され出した郷土出身画家が帰省中であり、且つ同氏自身も中央の文化を背負って町民の中に融け込んでいるところなので、この人を措いては無いと思いい制作を依頼、快諾を得た。

後は資材の調達であるが、盛田会長は当時七戸商業会の会長であった高山徳助氏（小川町）と協議、伝手を求めて青森市へ走って貰い、バック幕に必要な分の天竺木綿と絵具が入手できた。やがて生地は七戸保育園正面壁面の寸法に合わせて裁断・縫製され、製作場所も保育園と定めて準備万端整った。

某日、構想を練った画伯は、保育園の床一面に伸べられた画布に向かい、慎重に且つ一気に筆をはしらせ、かの雄渾華麗な「牡丹に唐獅子」のバック幕を仕上げたのであった。気魄溢るる描画の現場に立ち合ったのは、故聖海師の外何人もいないという。

待望のバック幕を得たその後の花菱会の舞台は、一段と華やかさを加えた事は言うまでもなく、和やいだ空気を醸し出してその効果抜群といったところであった。

## 六、結 び

時移り世を経て、盛田文造町長は昭和二十五年九月逝去、次いで花菱会も自然消滅。昭和三十六年からは金子聖海師も七戸保育園を離れて美光園の経営に専念する事となる。やがて旧園舎は取り壊して公民館としての機能を失い、昭和三十八年三月には町立中央公民館が現在地に完成といった経緯をたどっていった。

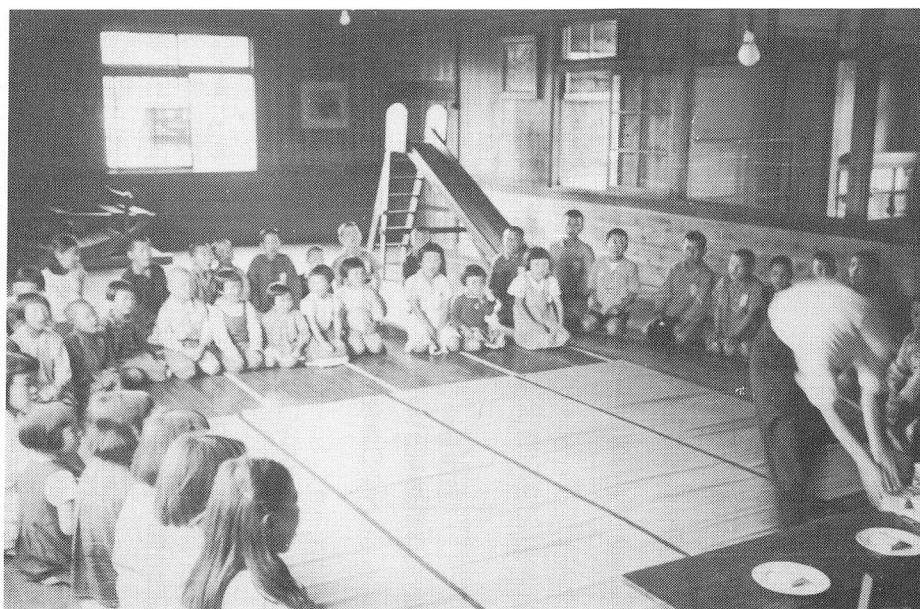
残念な事にこの間、このバック幕のことはいつしか忘れ去られ、大方の人々の口にはのぼる事もなくなつた。

然し、曾てその絵から受ける強烈な印象を頭に刻み込んだ人々もおり、時として「どうなっているのだろ」と話題とする事があつても、捜す手がかりとてないまま過ぎていった。それがある機会にひよっこりと目の前に現れて町の人々を驚喜させた。聞く所によると新装成った公民館の倉庫の柵に保管されてあつたか。

斯くして再び目の目を見る事となつたこの絵は昭和五十年代の町役場三階大會議室北側の壁面いっぱい飾られ、三十年ぶりに町民に披露できる事となつたのであつた。

現在展示されている柏葉館は、昭和六十一年八月に完成されたものであるが、町の宝ともすべきこの作品は、役場三階に置くよりは柏葉館の方が、より多くの町民に鑑賞して貰えるという町当局の配慮によるものであろう。

「牡丹に唐獅子」のこの大作は、横五二三センチに縦二六三センチ。物資窮乏のあの時代に、よくこれだけの大作が仕上げられたものだと、あらためて画伯の気魄とこれに係わつた人々の熱い思いに心を馳せずにはおられないところである。（終わり）



「牡丹に唐獅子」の制作場所となつた、当時の七戸保育園

# 会員の窓 ☆投稿エッセイ

「忘れえぬ女」

安田 保孝

私はいつの頃からか世界の4大美術館を回ってみたいという漠然とした希望を持っていた。それに火をつけたのが家内である。大分前から「お父さん、早く退職して足腰の丈夫なうちに海外旅行をしましょう」と言うのだ。早くやめたら後どうやって食っていくのだ、面白いことを言う奴だなどと軽く受け流していたが、何



モスクワでの安田夫妻  
クレムリンを背景に

回も言うものだから私もその気になって1年早く退職した。

退職した年にはヨーロッパ6カ国11都市駆け足旅行で大英博物館、パリのルーブル、オルセー、ポンピドゥー、そしてモロー美術館と西洋美術史を辿った。

2年目の春にはモスクワのトレチャコフ美術館で「忘れえぬ女」に再会し、プーシキン美術館、ボリシヨイ劇場でオペラを見、サンクトペテルブルクではエルミタージュ美術館、ロシア美術館、そして白夜の街を歩いた。

秋にはワシントン、フィラデルフィア、紅葉のアルバニーからハドソン川沿いにドライブしてニューヨークへ、その間ナショナルギャラリー、ボストン美術館、メトロポリタン美術館を回り、特に幻のバーンズコレクションには感動した。

私は昭和51年、40歳の時に、東京・日本橋三越デパートで、「ロシア国宝絵画展」を見た。その時の目玉は、クラムスコイの「忘れえぬ女」だった。大混雑でこんなことは後にも先にも初めてだが、部屋の中に太

鼓橋が築かれ、渡りながら立ち止まらずに、見ながら進むという寸法だ。

帝政ロシア時代、厳しい冬の朝、ペテルブルグの中心街を馬車で通りかかった女、身なりや気品のある顔立ちから上流階級の女だろう。背景の薄い紅の交じった空、白く淡い調子で描かれた街、馬車の座席の背にもたれた若い女性。その「忘れえぬ女」はどんな角度から見ても私をじっと見つめているのだ。美しい、しかし女の目には深い悲しみがある。その目が私をどこまでも追って離さない。その時の感動が忘れられなくて20年間再会を夢見ていた。ところがトレチャコフ美術館は長い行列、や

つと中に入ると冷房の故障で蒸し風呂、電気も節約しているのか部屋は暗く最悪の状態だった。20号室が1番充実していて、自画像、「トルストイの肖像」「忘れえぬ女」などクラムスコイの作品ばかりが飾られていた。

そんな悪条件で再会した時に思ったことは、感動しすぎた時は初恋の人と同じで、思い出にとどめておいて20年後などには会わない方がいいということだった。

(友の会会員)

## クラムスコイ

イワン・コラエビッチ・クラムスコイ。1837年オストロフ(露)に生まれる。1857〜1863年までペテルブルク美術アカデミーで学ぶが、保守的で停滞していた美術アカデミーに反対、60年代から80年代のロシアの民主的芸術運動の指導者となる。1870年には移動美術展協会を創立。同会の画家たちは、写実主義を基本にしてロシア社会の内部矛盾を直視し、民衆の側に立つ芸術創造に打ち込んだ。70年代の肖像画では特に高邁な精神に満ちた当時の知識人を描き、新しい理想像を追究。また、民衆の人性や反骨精神を鮮やかに表現した肖像画も制作した。19世紀のロシアリアリズム絵画の代表的巨匠の一人であり、美術評論家としても活躍。ロシアの画家の中で偉大な権威と強い影響力を持ち、尊厳を一身に集めた。

1897年ペテルブルクで没する。

1893年制作、キャンバスに油彩、75.5x99.0cm、モスクワ、トルチャコフ美術館所蔵。

《参考》『第2回ロシア美術展』『ロシア美術展』『西洋絵画作品名辞典』(株)三栄堂  
■「忘れえぬ女」を収録した『第2回ロシア美術展』『ロシア美術展』『西洋絵画展』図録は当美術館で自由に閲覧できます。ご利用ください。

## お便りをお寄せください

鷹山宇一記念美術館友の会では、会員の皆様の自由なご意見・ご感想を募集し、会報にて紹介して参りたいと思います。

思い出深い絵、好きな絵、お薦めの、また心に残った国内外の美術館についてそのほか友の会美術館への質問やご意見・ご感想などを、800字以内で自由にお書き下さい。

詳しくは事務局まで。お気軽にお問い合わせ下さい。

### 【原稿送り先】

郵便番号、住所、電話番号をお書きのうえ、

〒039-12501 青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94

鷹山宇一記念美術館「友の会事務局」

までお送り下さい。

なお、会報編集の都合上、原稿に一部修正を加えることがあります。ご了承下さい。

## 編集後記

美術館初代館長の故小原恭平先生は友の会が設立された時、ご自身の若い頃の文化活動を思い起こしながら「同人誌とか会報とかは、最初の3号までが大変なんだ。とにかく3号発行すれば、その経験が生きて何とかなるんだ。」と言われておりました。

実際に会の事業として会報を編集することになることまでさしぐさあり、失敗と試行錯誤の繰り返しでありました。けれども、この美術館に関わる多くの方々の想いを書き留めておきたい。次々と起きる出来事を記録にしたいと思うと、掲載するべき記事が数多くあつたことが救いとなりました。

友の会も結成5周年を迎え、会報もつややく16号を数えます。未熟で洗練されていない紙面ではありますが、会員と美術館を相互に繋ぐ媒体として内容の充実を努めたいと思っております。今後とも会員の皆様のご協力・ご指導をのぞいてまいります。